

第1章 まちづくりの方針

1. 森町の現況と課題

本町はこれまで、三木の里と呼ばれる美しい自然環境のなか、古来より農林業を中心とした産業や伝統文化を育み、「遠州の小京都」と呼ばれる風情ある町並みを形成してきました。また、2012年には、新東名高速道路が開通し、町に2つのインターチェンジが開設されたことで、交通利便性が飛躍的に向上しており、さらなる発展が期待されています。

しかし、全国的に人口減少・少子高齢化が本格化するなか、本町でも人口減少・少子高齢化が急速に進行しており、こうした現状が、生活に必要なサービスの維持、コミュニティの維持、公共交通の維持などに影響することも懸念されます。

このため、これからは、人口の減少抑制に向けた取組とともに、豊かな暮らしを維持することができるまちづくりを進めていく必要があります。

■ 課題の集約と整理

《森町の現況と課題》



《まちづくりの課題》

(1) 人口減少、少子高齢化に伴うまち全体の活力の低下

- ・人口減少・少子高齢化の顕在化
- ・地域コミュニティの衰退
- ・産業・文化の担い手の減少
- ・管理不足の土地や建物の増加
- ・生活を支えるサービスの質の低下

(2) 新たな交通基盤等を活かしたまちの活力向上

- ・町の2つのインターチェンジの活用
- ・周辺市町との連携促進

(3) 災害リスクへの懸念

- ・南海トラフ巨大地震や近年多発する豪雨災害への懸念
- ・災害に対する市街地の脆弱性の存在

第1章

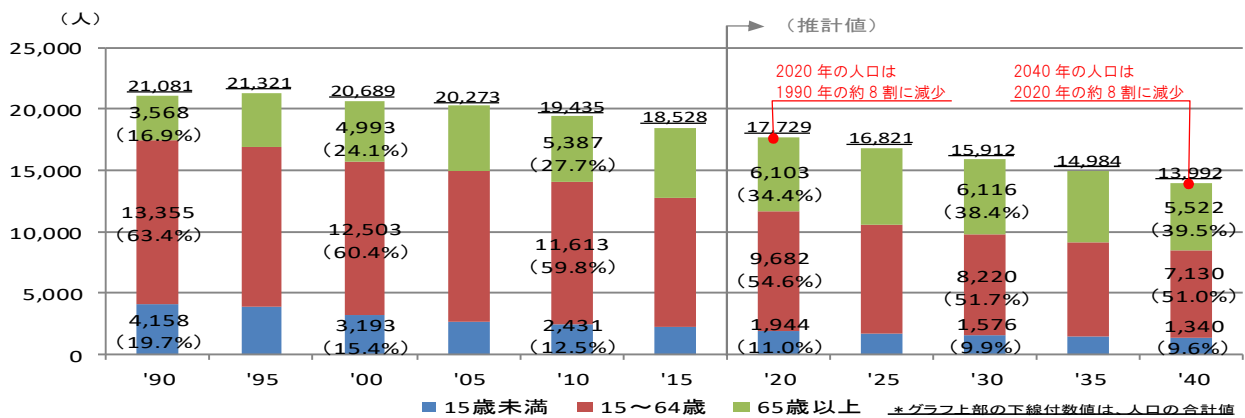
(1) 人口減少、少子高齢化に伴うまち全体の活力の低下

- 今後20年間（現在2020年から将来2040年まで）で、人口は現在の約8割となり、町民の約4割が65歳以上になると推計されています。
- 人口減少・少子高齢化が進むことで、地域コミュニティの衰退、生業の担い手の減少、管理不足の土地や建物の増加、生活を支えるサービスの質の低下等が懸念されます。

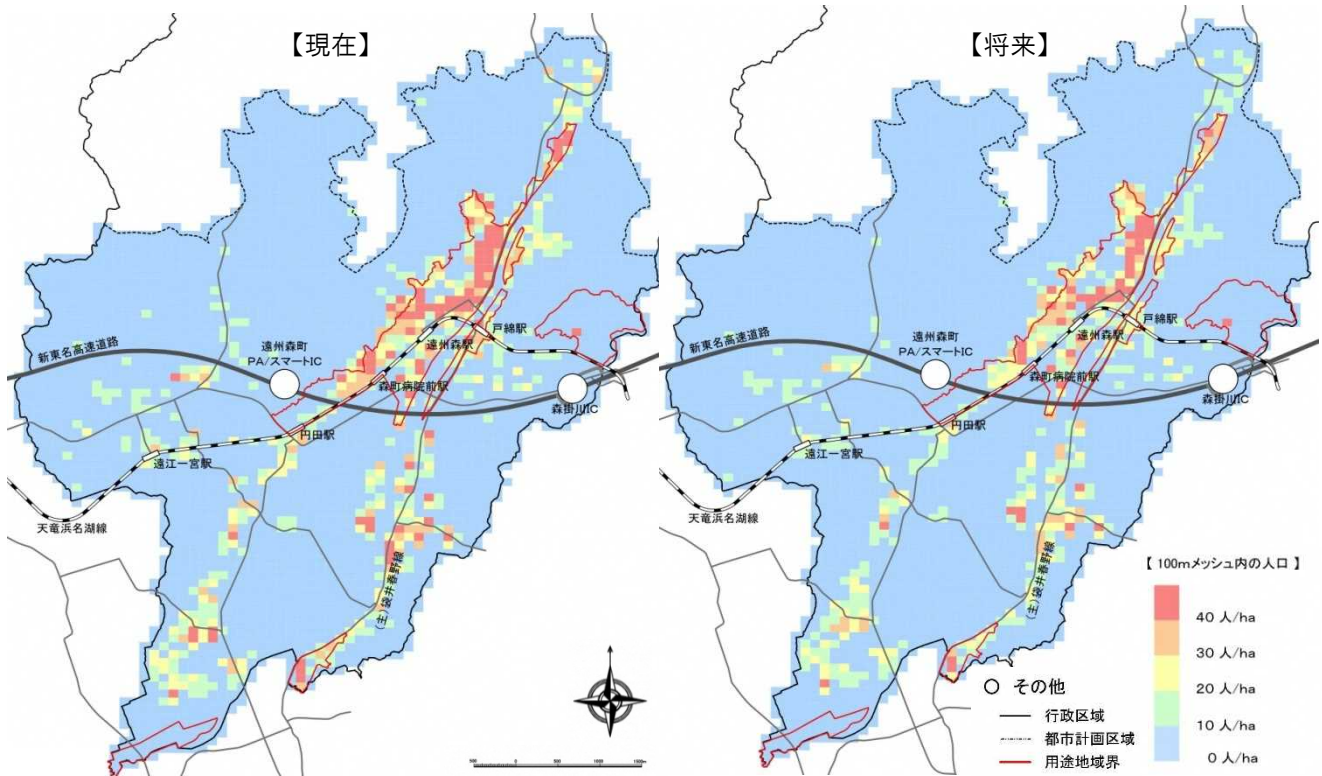
① 人口減少・少子高齢化の顕在化

- ・ 2000年以降、急激に人口減少・少子高齢化が進行しており、2040年には、人口は2020年の約8割まで減少し、約4割が65歳以上になると推計。
- ・ 100mメッシュごとの人口分布をみると、用途地域内の本町（ほんまち）や城下など、昔ながらの住宅地や集落で人口減少の進行が周囲より早いと推察。

■ 人口・高齢化の動向（参考：2015 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所資料）



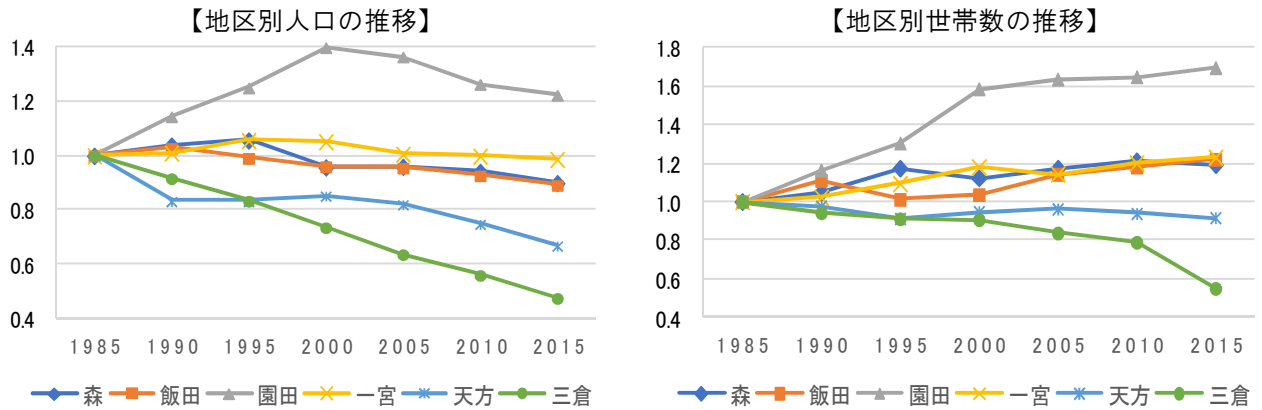
■ 現在と将来の人口分布（参考：2015 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所資料）



② 地域コミュニティの衰退

- ・ 都市計画区域内の市街地や集落（森、飯田、園田、一宮地区）の人口及び世帯数は維持傾向。
- ・ 一方、都市計画区域外である中山間地の三倉や天方地区の人口及び世帯数は減少傾向で、特に三倉地区の世帯数が減少している。

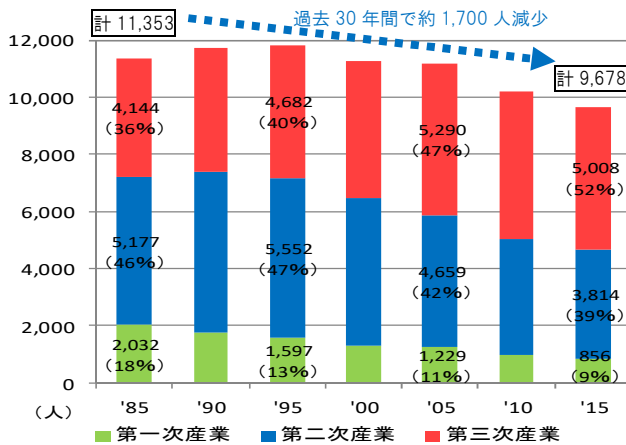
■ 地区別の人口及び世帯数の推移（出典：2015 国勢調査、いずれも1985年（S60）を1とした場合）



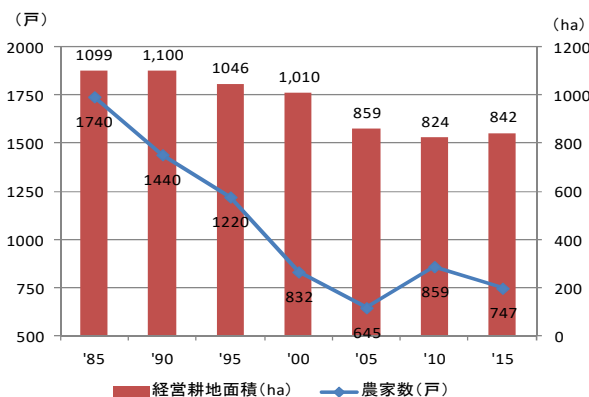
③ 生業の担い手の減少

- ・ 産業別就業者数は、1995年をピークに減少傾向にあり、2015年には1万人を割り込んでいる。
- ・ 就業者数の減少に伴い、農家や工場事業所等も減少。

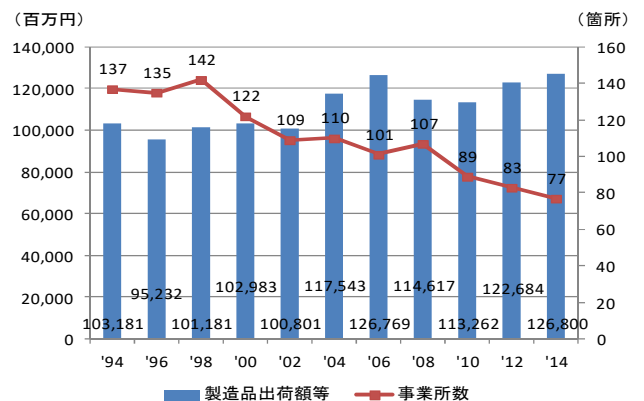
■ 産業別就業者数の推移（参考：2015 国勢調査及び国立社会保障・人口問題研究所資料）



■ 農家数と経営耕地面積（出典：農林業センサス）



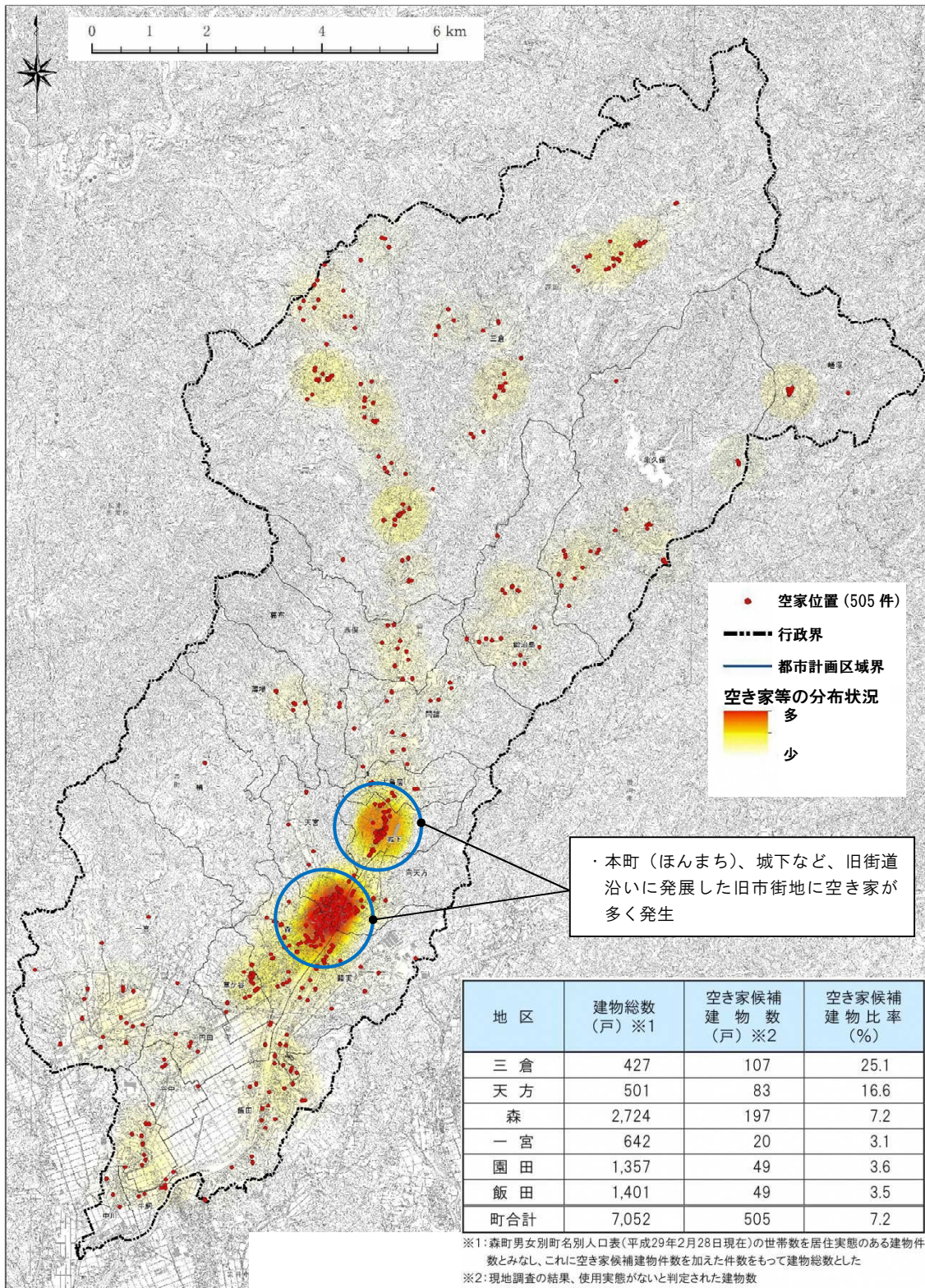
■ 工場事業所数と製造品出荷額等（出典：工業統計調査）



④ 管理不足の土地や建物の増加

- ・ 人口減少が進むことで、空き家が増加しつつある。なかでも、本町（ほんまち）・城下など、旧街道沿いに発展した旧市街地に空き家が多く発生。
- ・ 人口減少・少子高齢化に伴い、生産年齢人口が減少することで、耕作放棄地など管理不足の土地も増加しつつある。

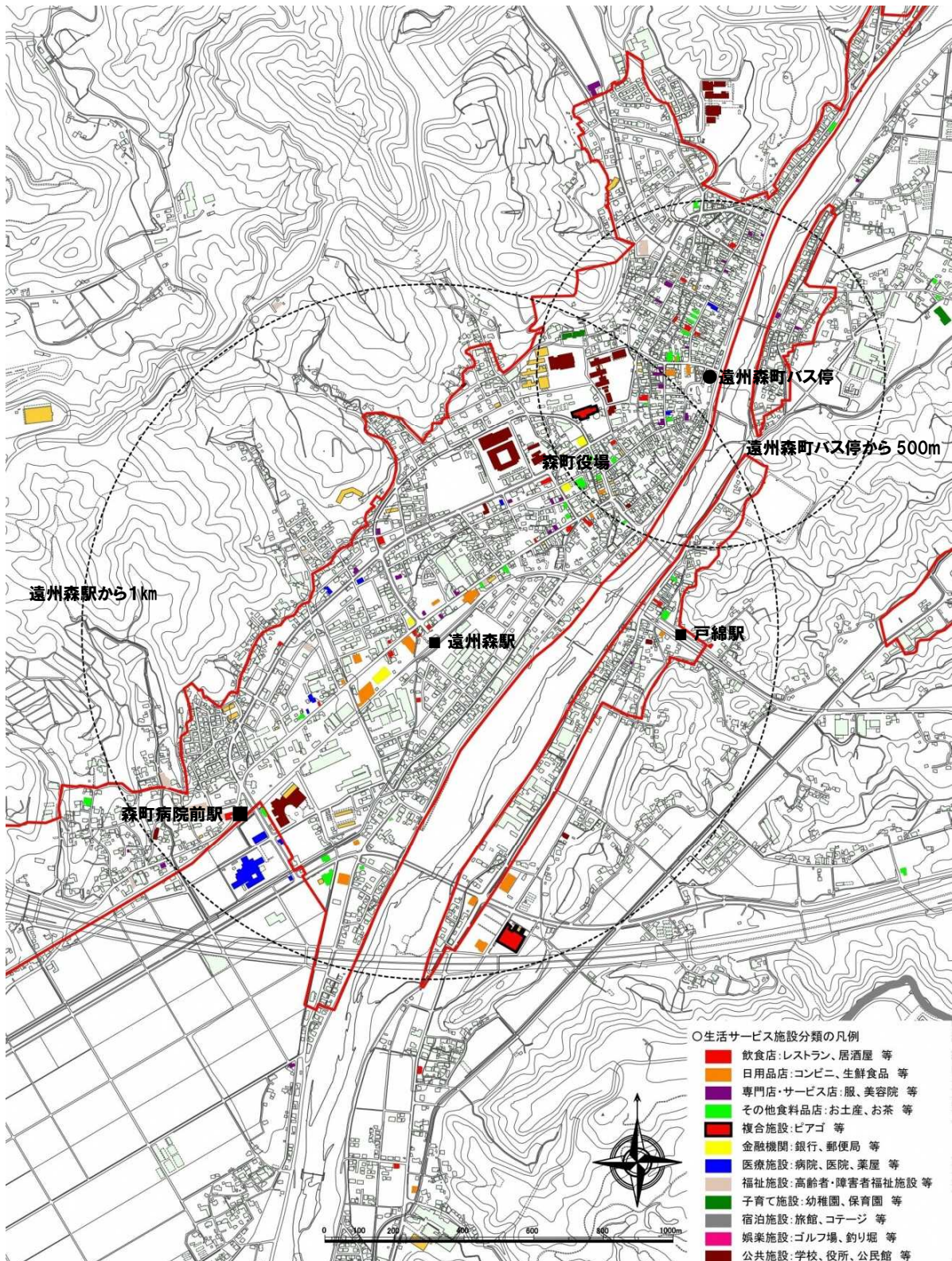
■ 空き家候補建物の分布状況及び地区別の建物数・建物比率 （出典：森町空き家等実態調査）



⑤ 生活を支えるサービスの質の低下

- ・ 各種生活利便施設（医療、福祉、子育て、商業等）は、施設周辺の一定の人口密度に支えられるとされており、町では、人口の9割が集中する都市計画区域内に、全施設の8割強が立地。
- ・ 町の中心部には、行政施設や生活を豊かにする多様な店舗（飲食店、美容院等）も立地。
- ・ 今後、人口減少が進むことで、これら生活を支える施設が成り立たなくなることが懸念。

■ 町の中心部周辺の生活利便施設の分布



第1章

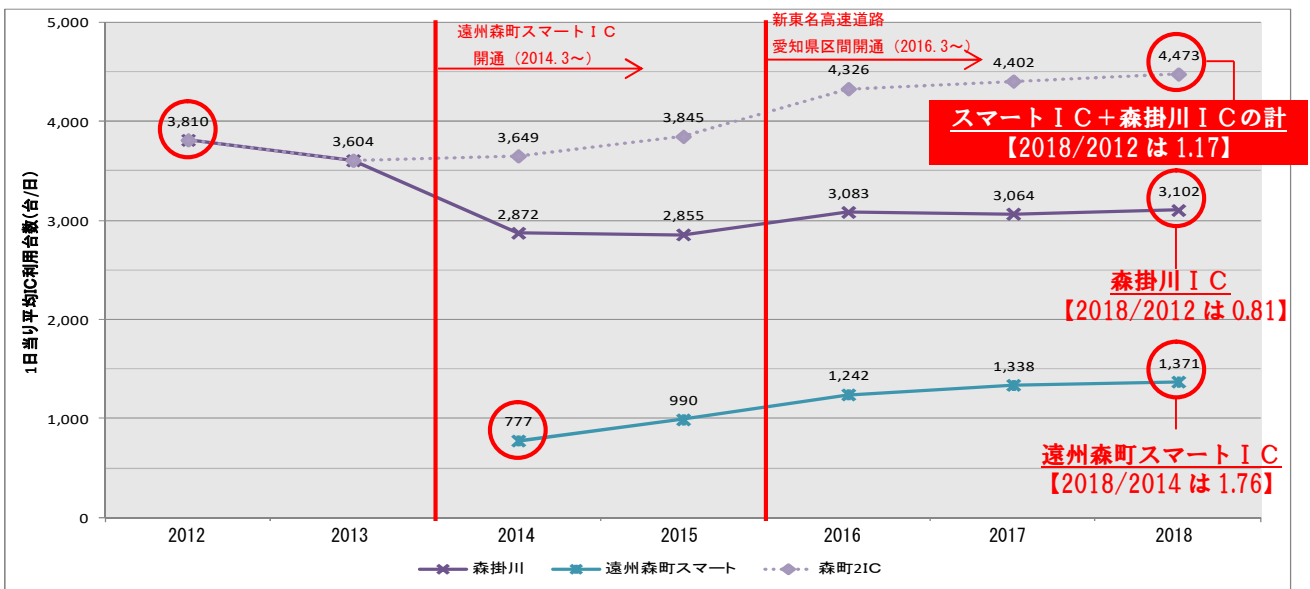
(2) 新たな交通基盤等を活かしたまちの活力向上

- 供用開始以降、新東名高速道路森掛川IC及び遠州森町スマートICの自動車利用台数は毎年増加しており、産業出荷額や観光客数等も増加しています。
- 今後もこの新たな交通基盤を使うことで、町の中心部をはじめ、町全体の活力向上を図ることが求められます。

① 新東名高速道路整備以降、産業出荷額や観光客等が増加

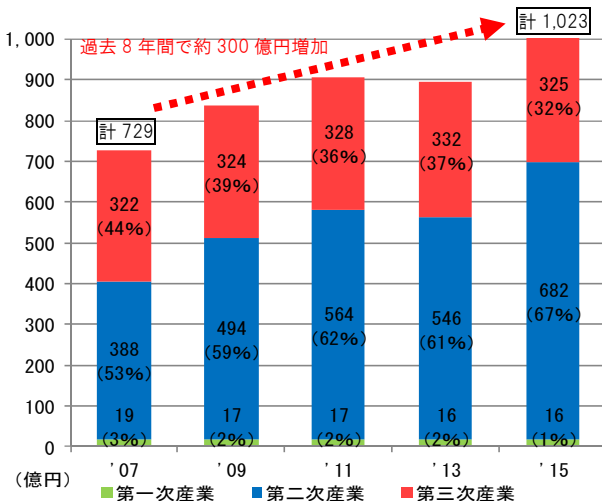
- ・ 森掛川IC及び遠州森町スマートICの利用台数は、増加傾向にあり、2017年には約4,400台の自動車利用。
- ・ 産業別生産額も増加しており、2015年には1,000億円を超過。特に、第2次産業の伸びが大きい。
- ・ 観光客も増加しており、近年は年間120万人を超える観光客が来訪。

■ 新東名高速道路インターチェンジの利用状況 (出典：遠州森町スマートIC等の利用状況等 2018)



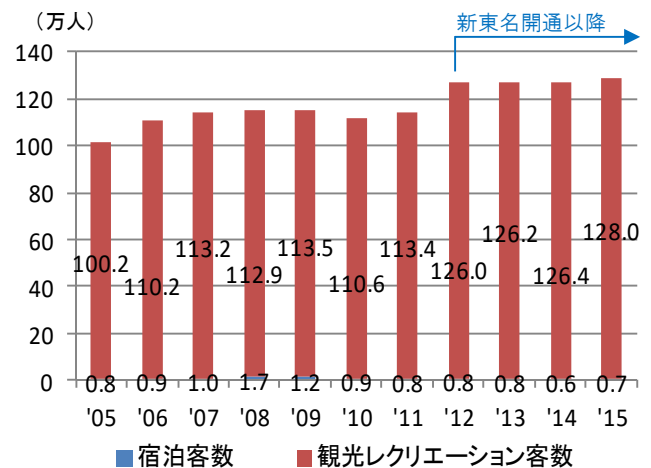
■ 産業別生産額の推移

(出典：遠州森町スマートIC等の利用状況等 2018)



■ 観光客の推移

(出典：静岡県観光交流の動向)



② 新たな交通基盤を活かした産業等の誘致

- 町としては、2つのインターチェンジを活用することで、定住化促進、企業誘致の促進、観光振興の促進等が期待される。また、町全体の活力を高めるため、静岡県の“ふじのくに”のフロンティアを拓く取組を活用した産業誘致等を進めている。

■ インターチェンジ活用により期待される効果（これまでの町の検討から）

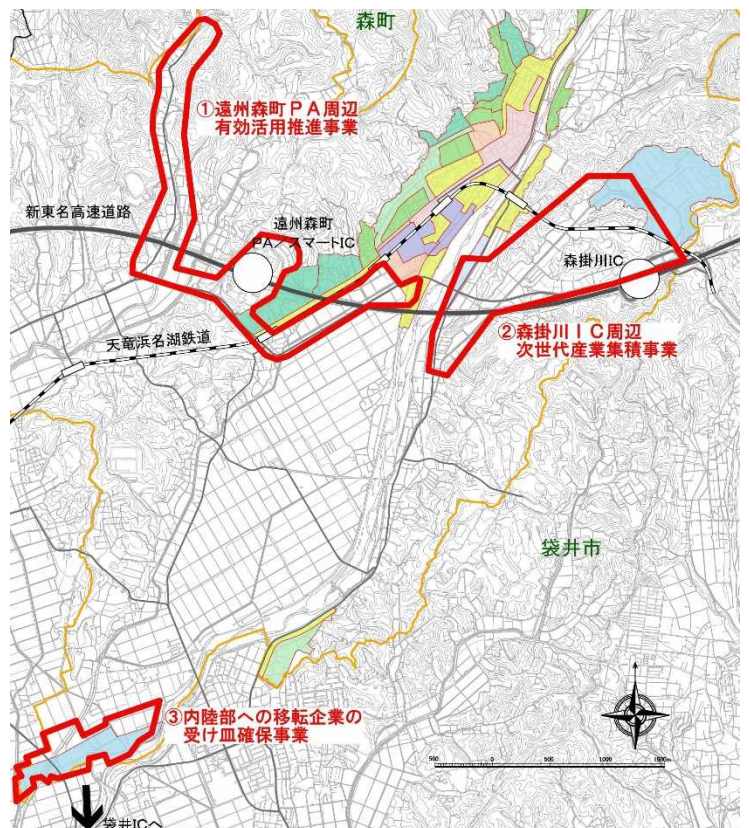
視点	効果
1. 定住化促進	<ul style="list-style-type: none"> 2015年国勢調査では、本県の人口が減少傾向にありながらも、新東名高速道路の県内ICで最も利用の多い「浜松浜北IC」のある浜松市浜北区及び「藤枝岡部IC」のある藤枝市では、人口及び世帯数が2010年国勢調査よりも増加している状況にある。 このため、森町においても「遠州森町スマートIC」及び「森掛川IC」と連携し、他の自治体での暮らしに負けない良好な生活が確保できれば、森町の定住人口の拡大が期待される。
2. 企業誘致の促進	<ul style="list-style-type: none"> 森町は、豊かな自然環境を有するため、企業のイメージアップを図るには絶好の場所であるとともに、大規模災害時にも津波被害等、甚大な被害が発生せず、企業のBCP（事業継続）面から見ても良好な場所となっている。 こうした中、企業の生産性向上に寄与できる、森町内のICを利用しやすい環境を確保していくことで、企業誘致の増加が期待される。
3. 観光振興の促進	<ul style="list-style-type: none"> 森町の観光客の多数は、小國神社だけを参拝する単発的な観光スタイルとなっており、小國神社以外の観光資源に立ち寄らず、観光客の増加が観光振興に寄与していない状況となっている。 このため、魅力ある観光資源と森町の東西に設置された2つのICを活用し、森町を巡る回遊型の観光スタイルを構築することで、小國神社を訪れる観光客の森町内での長時間滞在が図られ、観光振興による地域活力を向上させることが期待できる。

■ “ふじのくに”のフロンティアを拓く取組（出典：静岡県資料）

【事業別の施策内容】

- 遠州森町PA周辺有効活用推進事業
 - 農村景観や自然環境を生かした憩いの場や休憩施設の整備
 - 地域特産品を活用した物産販売施設や体験農園、地産地消レストラン等の6次産業化施設の整備
 - 緊急輸送路や防災備蓄倉庫の整備
- 森掛川IC周辺次世代産業集積事業
 - 森掛川IC周辺まちづくり報告書を基本として、地区ごとに事業推進
 - 北戸綿工業団地南側は、工業系地区・IC周辺開発地区として、製造業や物流業等を誘致することにより、工業系の企業集積
 - 県道掛川天竜線（都市計画道路森町袋井インター通り線）沿線は、幹線道路沿道地区として、商業系施設を誘致することにより沿道利用型土地利用
 - 県道袋井春野線沿道の工業地域においては、遊休工場の有効利用
- 内陸部への移転企業の受け皿確保事業
 - 工業専用区域内の未利用地を有効活用するためのアクセス道路整備
 - 沿岸部からの移転企業の受け皿となる工業団地の整備

【位置図】



(3) 災害リスクへの懸念

- 静岡県の各種被害想定やハザードマップでは、南海トラフ巨大地震や想定される最大規模の豪雨等の大規模な災害があった場合、市街地を中心に甚大な被害が想定されています。
- 町屋や蔵など昔ながらの街並みが残る地区では、老朽化した木造建物や狭隘道路が多いなどの特徴から延焼リスクが高く、災害に対する市街地の脆弱性が懸念されます。

○ 災害リスクの概要

- ① 災害履歴をみると、七夕豪雨、伊勢湾台風などの際、太田川沿いや大府川（三倉）で浸水被害。
 - ② 都市計画区域外の傾斜地に、土砂災害のリスクが多く分布。都市計画区域内にも土砂災害のリスクはあるものの、住宅地など都市的土地利用と重なるエリアは限定的。
 - ③ 1,000年に1回以上の豪雨という、想定しうる最大規模の降雨があった場合、太田川沿いの市街地において浸水リスクが懸念。城下、森、向天方の一部等では、浸水深が3mを超える地区もあると想定。
 - ④ 静岡県第4次地震被害想定では、南海トラフ巨大地震により、町全体で震度6強以上の揺れと、新東名高速道路より南側の田畑を中心に液状化が想定されている。想定される被害は、最悪のケースで以下のとおり。
 - ・ 死者数 約130人（要因は、建物倒壊が約100、火災が約20、山・崖崩れが約10）
 - ・ 建物全壊・焼失 約3,960棟（要因は、揺れが約3,400、火災が約500、山・崖崩れが約60等）
 - * 上記の死者数、建物全壊・焼失数とその要因は、四捨五入の関係で一致していない。
- この他、本町（ほんまち）から城下へ続く街道周辺は、昔ながらの街並みが残る一方、老朽化した木造建物が多く、また道路幅員が狭い、空地が少ないといった特徴から、火災発生時の延焼リスクが高い。

① 災害履歴（出典：静岡県地震防災センターホームページ）

【災害事例 豪雨】

- ・ 1962年9月4日 太田川上流大河内で深夜2～3時にかけて1時間雨量119mmの豪雨があった。太田川は急増水して、土砂崩れ・浸水により家屋に被害を生じた。

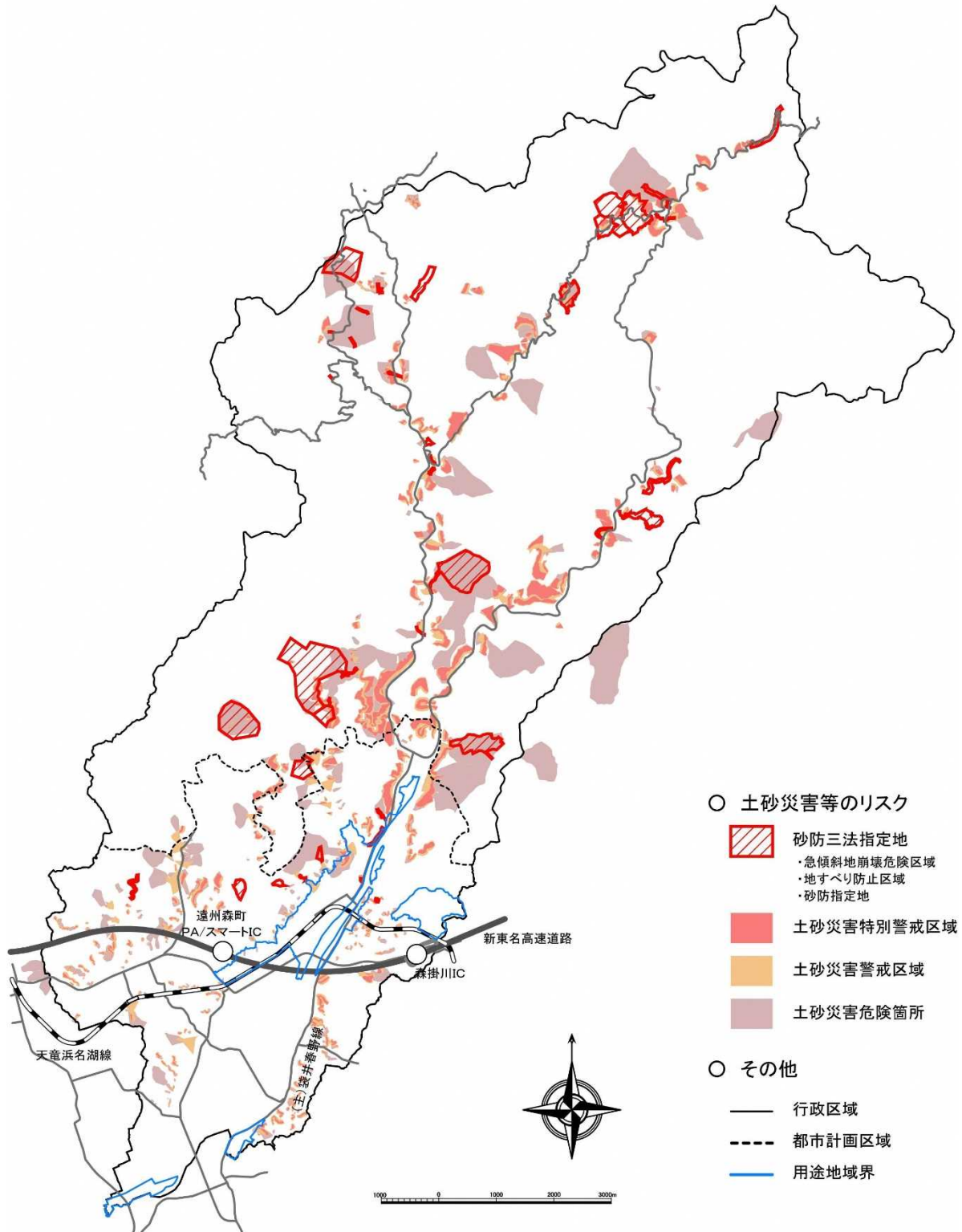
【災害事例 台風】

- ・ 1911年夏 飯田村では太田川洪水のため、橋梁流失2箇所、山崩2箇所、田畑の被害は甚大であった。一宮村でも堤防決壊31箇所、山崩れは数え切れないほど生じた。
- ・ 1959年夏（伊勢湾台風） 県西部で被害が多かった。当地は森町三倉の大府川畔で全半壊家屋が多かった。また道路は周智トンネルなど各所で寸断、交通途絶した。
- ・ 1974年夏（七夕豪雨） 全県下に被害を与えた豪雨で、当地の被害は死者1人、負傷者5人、全壊1戸、半壊2戸、流失9戸、床上浸水217戸、床下浸水494戸、冠水田畑35.47ha、決壊道路49箇所、橋梁8箇所、堤防8箇所、山崩86箇所であった。

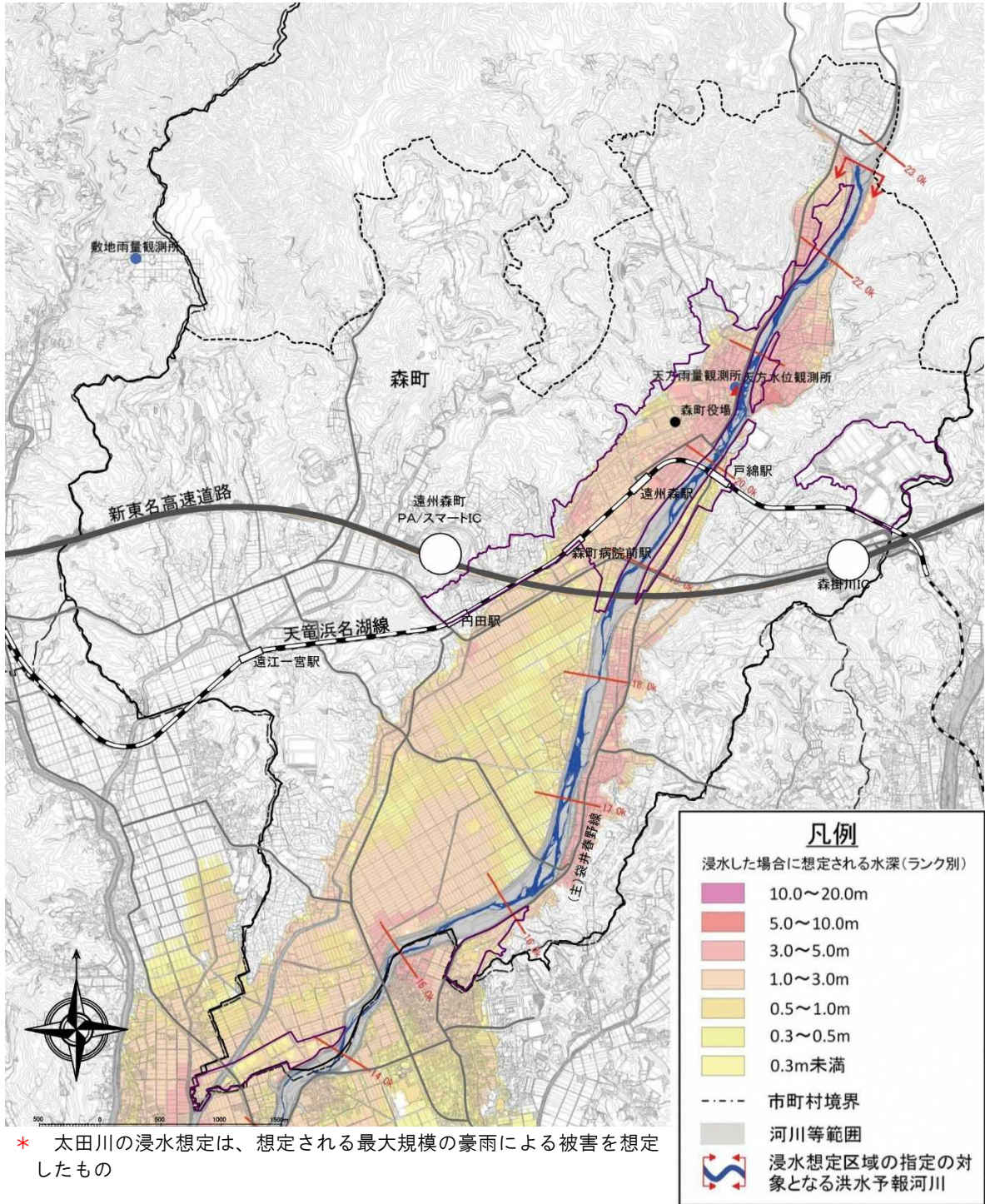
【災害事例 地震】

- ・ 1944年冬（東南海地震 M=7.9） 県中・西部に被害があった。当地では森で全壊1戸、一宮で全壊12戸、半壊23戸、園田で全壊25戸、半壊11戸、飯田で全壊12戸、半壊60戸などの被害があった。三倉・天方では全半壊はない。各地での震度は、5～6だった。

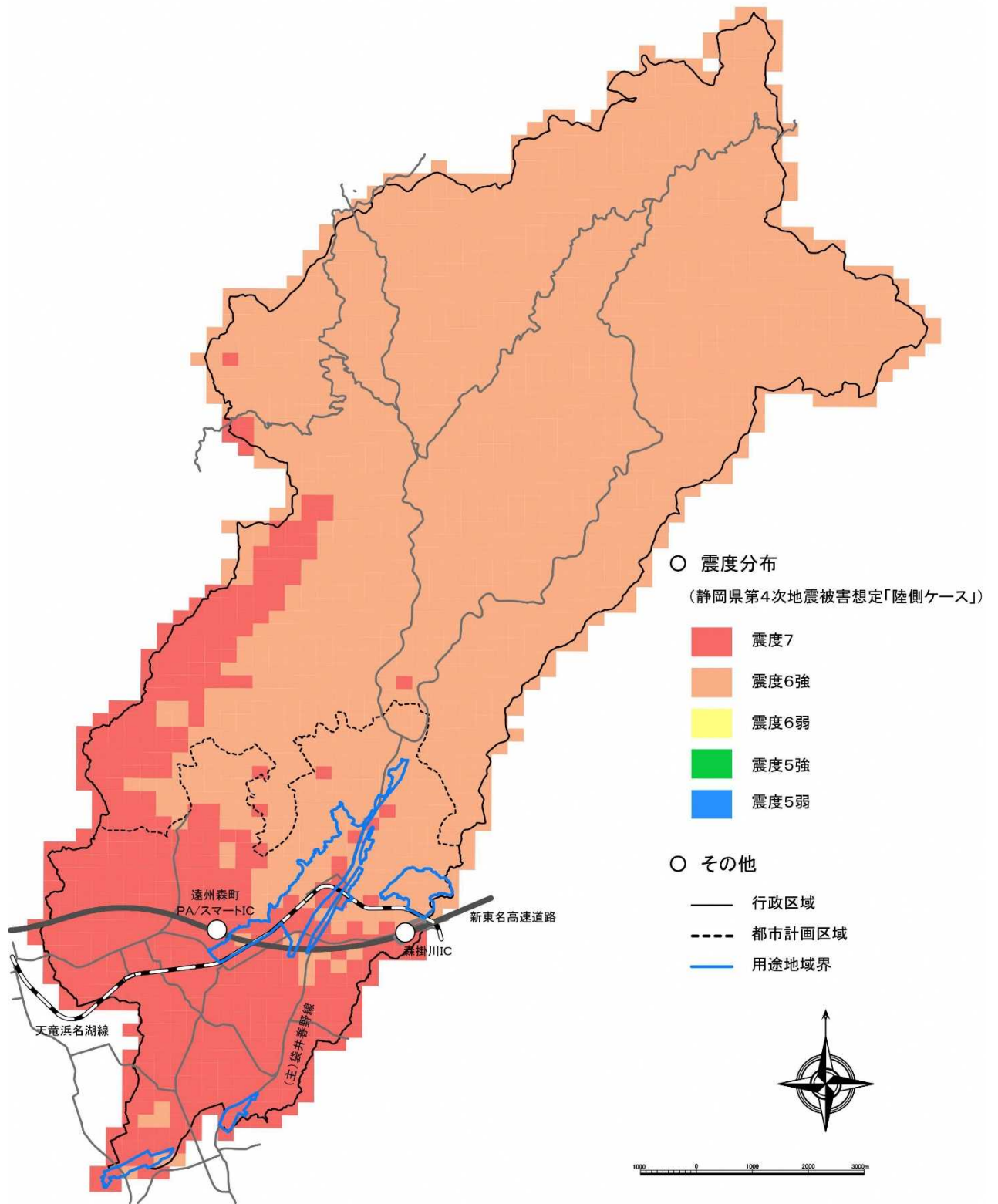
② 土砂災害（出典：県提供資料、国土数値情報）



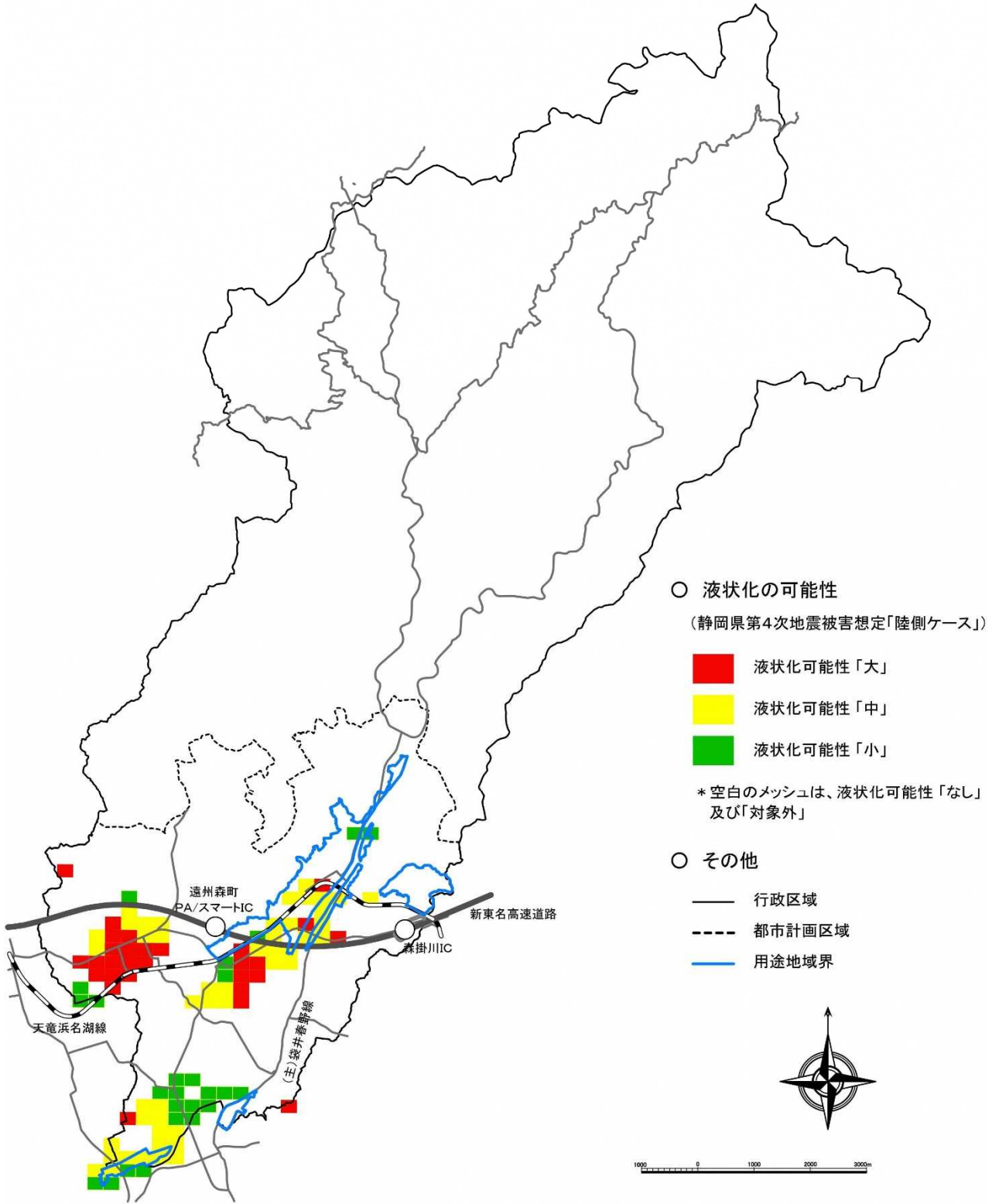
③ 河川洪水（出典：太田川洪水浸水想定区域図 平成 29 年 7 月 7 日付け静岡県告示第 557 号）



④-1 震度分布（出典：静岡県第4次地震被害想定）



④-2 液状化（出典：静岡県第4次地震被害想定）



2. 都市計画マスタープランにおけるまちづくりの考え方

「森町都市計画マスタープラン」は、「第9次森町総合計画」等に即し、都市計画における各種個別計画を総括し、調整する計画です。

「森町都市計画マスタープラン」では、「第9次森町総合計画」に掲げる「住む人も訪れる人も心とらぐ森町」を実現し、「豊かな暮らし」を維持していくため、「『医・職・住』×『交流』のまちづくり」をまちづくりのテーマとし、町の規模、形を設定してまちづくりを進めていきます。

立地適正化計画は、都市計画マスタープランの高度化版であり、都市計画マスタープランに示したまちづくりの考え方を実現していく計画です。

(1) 森町における「豊かな暮らし」

① 人口減少時代における身の丈にあった「コンパクト+ネットワーク」のまちづくり

人口減少・少子高齢化により、地域のコミュニティ衰退や生活に必要なサービスや公共交通の利便性の低下が懸念されるなか、まちを持続していくためには、人口や財政の規模に応じた身の丈にあった「コンパクト+ネットワーク」のまちづくりに取り組んでいく必要があります。

② 「コンパクト+ネットワーク」のまちづくりに取り組む際、大切にすべき「豊かな暮らし」

「コンパクト+ネットワーク」のまちづくりにおいても、生活に不足するものを確保することは必要ですが、それ以上に、町民に「住み心地が良く、自分の町として愛着を持ち、住み続けたい」と感じさせる町の豊かさに目を向け、豊かに暮らし続けられる環境を維持していくことが大切と考えます。

③ 森町における「豊かな暮らし」の維持に向けて

森町における「豊かな暮らし」とは、町民一人ひとりにとって違うものですが、例えば、街の暮らしも田舎暮らしも楽しめる環境、元気な高齢者、人や地域とのつながり等が想起されます。

「森町人口ビジョン及びまち・ひと・しごと創生総合戦略」等に基づく人口減少の抑制に向けた取組とともに、「豊かな暮らし」を維持することができるまちづくりを進めていく必要があります。

■ 森町における豊かな暮らしのイメージ (出典：TENCOMORI (静岡県森町移住のススメ))



・ 自宅をゲストハウスとして改築、暮らしと生業を両立。



・ 古民家を改修した自家焙煎珈琲屋。入口には、自家栽培のトウモロコシやネギなど、旬の農作物が並ぶ。



・ 大自然に囲まれた環境を活かし、狩猟とグラフィックデザインで生計。趣味と仕事を両立。

(2) 「豊かな暮らし」の維持に向けたまちづくりのテーマ

暮らしや交流に必要な様々な機能を掛け合わせ、まちの活力や魅力を高めていくことで、「住みたい・住み続けたい」と町民が思える、また「訪れたい」と観光客が思える、「豊かな暮らし」があるまちを目指し、まちづくりのテーマとして『「医・職・住」×「交流」のまちづくり』を設定します。

■ まちづくりのテーマ

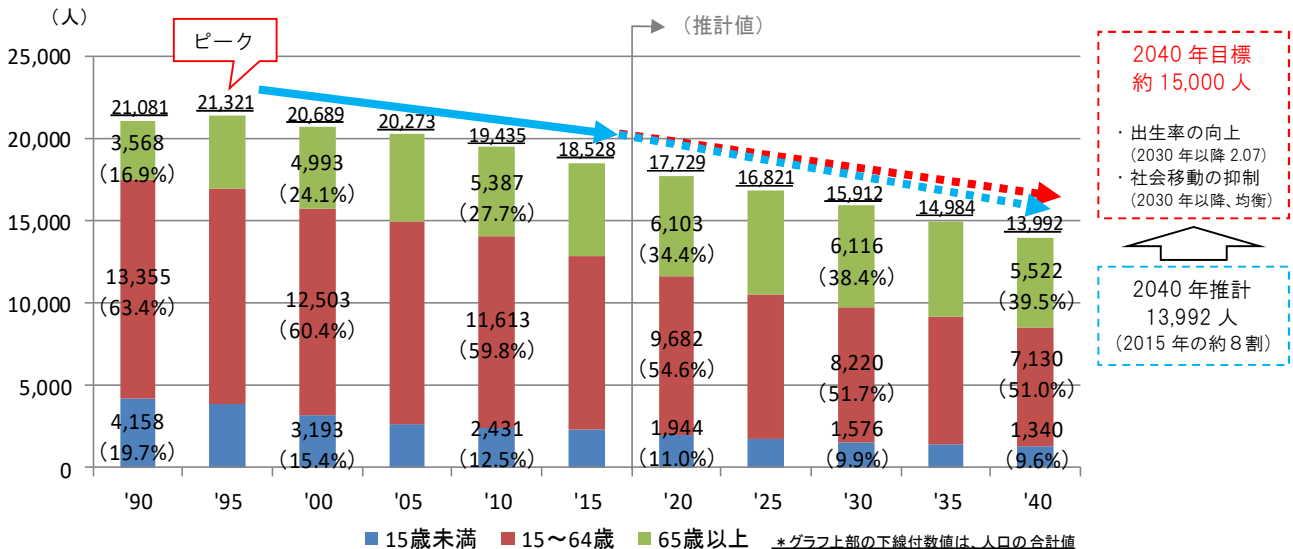
「医・職・住」×「交流」のまちづくり

- 『医』・・・ 子どもから高齢者までを対象とした医療、福祉、介護を指します。住み慣れた場所で、安心して子育てをし、健康に暮らし続けていくために、これまでの取組にもとづく地域医療として先進的な『医』の環境を活かしていきます。
- 『職』・・・ 安定した雇用や就業の場所の確保のことを指します。暮らしと生業は不可分であることから、町民が町で生活し続けていけるように、また町が現在の機能を維持していけるように、地域特性や立地を活かした産業誘致や、就業希望者と企業のマッチング支援、基幹産業の一つである農林業の活性化など『職』の充実を図ります。
- 『住』・・・ 個々の建物としての住宅だけでなく、ライフスタイルや地域との関わり方、生活サービスや公共交通との関係による住環境までを指します。社会が成熟したなか、多様化する市民ニーズに合わせて、多様な『住』環境の形成を図ります。
- 『交流』・・・ 森町の観光に適した環境や観光客をもてなす関係者の努力等により、人口約 1.8 万人の森町に、年間 120 万人を超える観光客が訪れています。人口減少・高齢化が進むなかでも町の活力を維持するために、住む人も訪れる人も含めた、地域や地域の人々と多様に関わる「関係人口」のエネルギーを、まちづくりに波及させることを目指します。

(3) 「豊かな暮らし」を維持するためのまちの規模

「豊かな暮らし」を維持していくために必要な将来の人口規模は、「森町人口ビジョン及びまち・ひと・しごと創生総合戦略」の目標値を踏まえ、2040年に約 15,000 人とすることを目指します（人口ピーク以降の人口減少を緩やかにするため、2025年に 17,000 人（第9次森町総合計画の目標値）、2060年に 13,000 人を確保）。

■ 将来人口推計と町の考え方 (出典：国勢調査及び国立社会保障 人口問題研究所資料、森町人口ビジョン)



(4) 「豊かな暮らし」を維持するためのまちの形

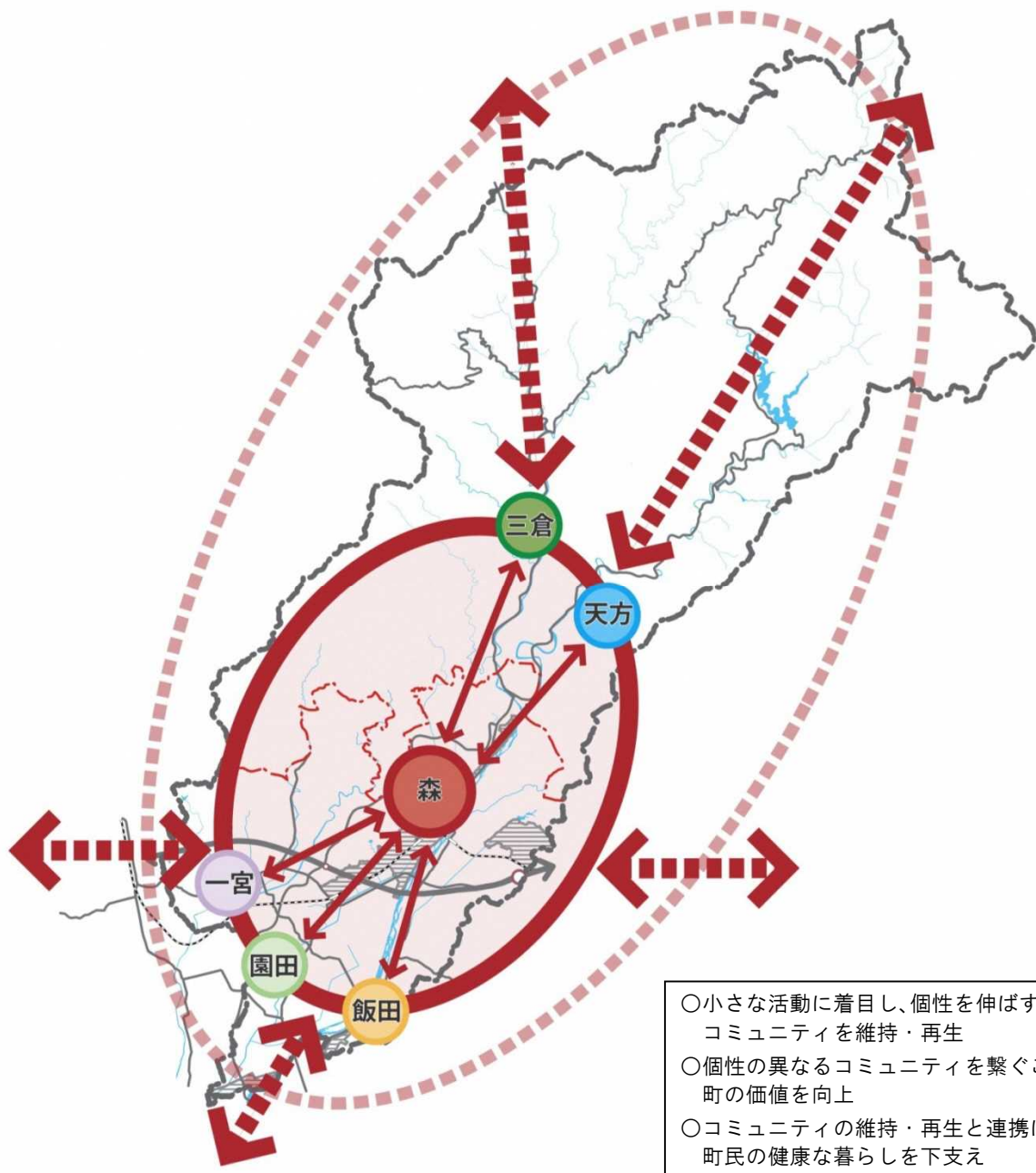
1) これからのまちの形の考え方

まちを持続し「豊か」に暮らし続けていくために、これからのまちの形を考える際に大切な3つの視点を設定します。

視点① 「森町」の価値を高める、コミュニティごとのまちづくりと連携

- ・ 小さな活動に着目し、個性を伸ばすことで、コミュニティを維持・再生
- ・ 個性の異なるコミュニティを繋ぐことで、町の価値を向上
- ・ コミュニティの維持・再生と連携により、町民の健康な暮らしを下支え

■ コミュニティごとのまちづくりと連携のイメージ



- 小さな活動に着目し、個性を伸ばすことで、コミュニティを維持・再生
- 個性の異なるコミュニティを繋ぐことで、町の価値を向上
- コミュニティの維持・再生と連携により、町民の健康な暮らしを下支え

視点② 暮らし・生業・観光の複合的なまちづくり

- ・ 町の中心部における「医・職・住」×「交流」のまちづくりの実践
- ・ 集落地における、暮らしを支え、活力を創出する拠点の形成
- ・ エリアごとの特性を活かしたまちづくり

■ 暮らし・生業・観光の複合的なまちづくり実現のイメージ（参考）

多様なライフスタイルを支える「住」まいの提供

① 空き家の賃貸利用とマッチング

所有者が手放したくないと考えている空き家等を森町への移住希望者のお試し住まいとして利用するなど活用について検討し、町は空き家の所有者と利用希望者のマッチングに努める。

② 敷地の統合

間口が狭く奥行きのある敷地では、現在の住宅ニーズに併せ、2つの敷地を1つにして利用することも検討する。この際、景観計画などでルールを設けることで、「遠州の小京都」が感じられる、町並みに配慮した景観へと誘導する。

③ リノベーションの積極的な推進

利用されていない町屋や蔵をまちの資源と捉え、町がリノベーションに積極的な支援をすることで、職住同一の住宅や店舗としての活用を促す。

ワークインレジデンス等で、地域に必要な「職」を創造

① ワークインレジデンスの推進

空き家をツールに、手に職を持つ人材を移住者として呼び込む。職種は、地域に必要な店舗やサービスを、地域が指定する。

② 森町ブランドのブランディング

「遠州の小京都」や農産物等を活かした商品づくりと関連する担い手育成を図る。（観光コース設定、焼物や農業の体験プログラム、茶・菓子・陶器等を組み合わせたセットサービス等）

③ 2つのICを活かした産業振興

新東名高速道路により飛躍的に高まった交通利便性を活かし、企業誘致や観光振興を促進する。

既存工業団地周辺では、製造業や物流業など工業系の企業集積を図る。また観光動線となる道路沿道では地場産品の販売所やレストラン等、地元住民も来訪者も利用できる土地利用を誘導する。

お達者な暮らしを支える、地域医療として先進的な「医」の環境活用

① 在宅医療・家庭医療・予防医療の充実

暮らし慣れた地域で、なるべく長い間、健康に暮らし続けられるように、森町病院や家庭医療センター、地域包括支援センター等の活用や、これら施設と公共交通との連携促進等により、在宅医療・家庭医療・予防医療等を充実させる。

② ついつい歩きたくなる環境の形成

生活利便施設の集積、太田川などの自然環境、「遠州の小京都」が感じられる町並み、日常のご近所さんとの挨拶・交流等の環境などを活かし、「ついつい歩きたくなる」と感じられる環境を形成し、町民の健康づくりを支える。

③ 地場産業を活かした健康づくりの促進

地産地消や食育を進めることで、食を通じた健康づくりを促進する。このことで、米や茶など地場産業の振興にも繋げる。

まちづくりを通じた「交流」の促進

① 町屋や蔵、店を活かした居場所づくり

住宅の土間や縁側、商店の店先などを利用して、子どもから高齢者まで、住民から観光客まで、様々な人々が交流できるまちなかの居場所を設ける。建物の建替えや改修の機会を通じ、居場所づくりを促す。

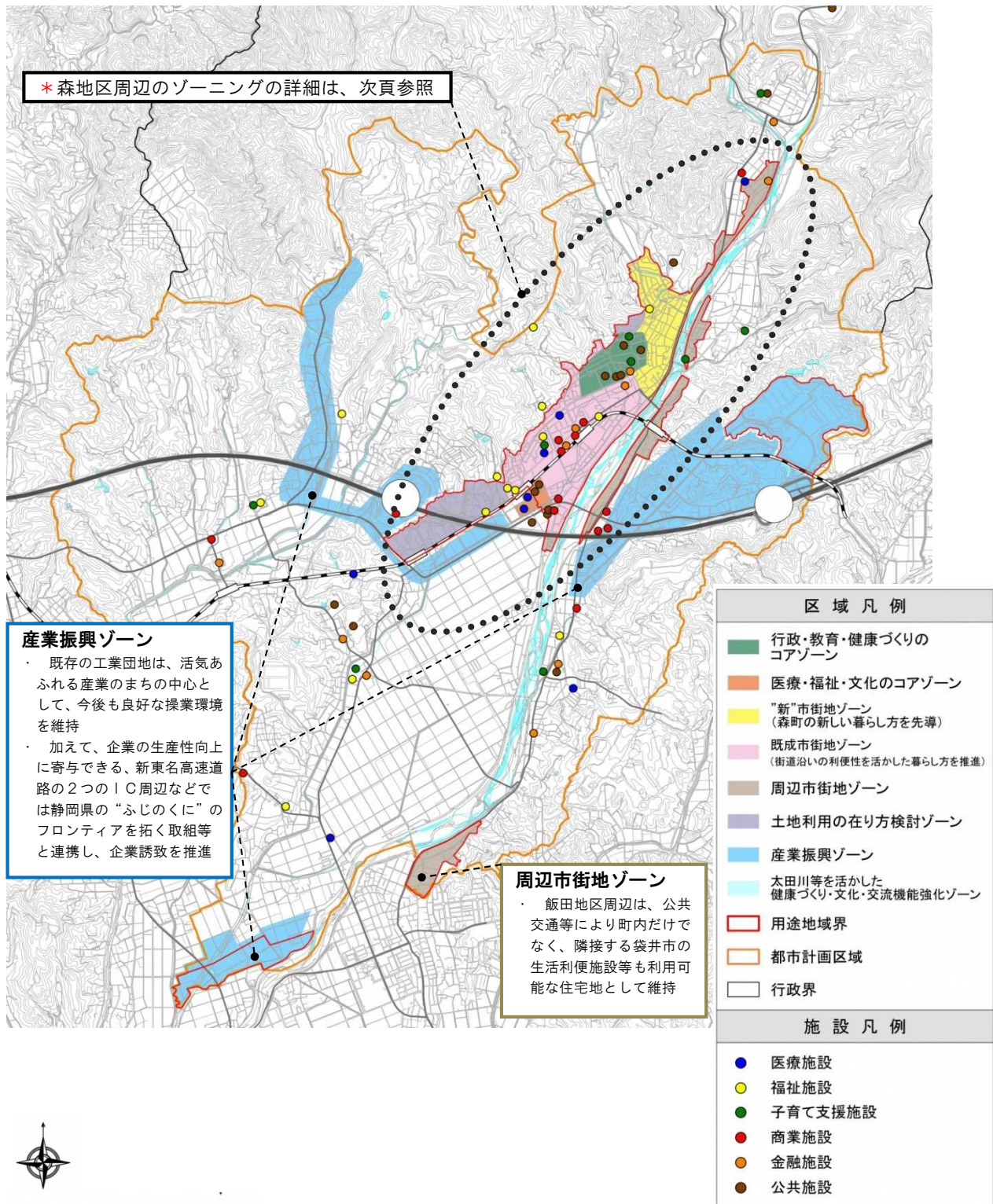
② まち歩きやイベントによる関係づくり

買物・通勤・通学などの日常的なまち歩きや、定期的に行われるイベントの機会を通じ、住民同士、住民と来訪者などの関係づくりを促す。

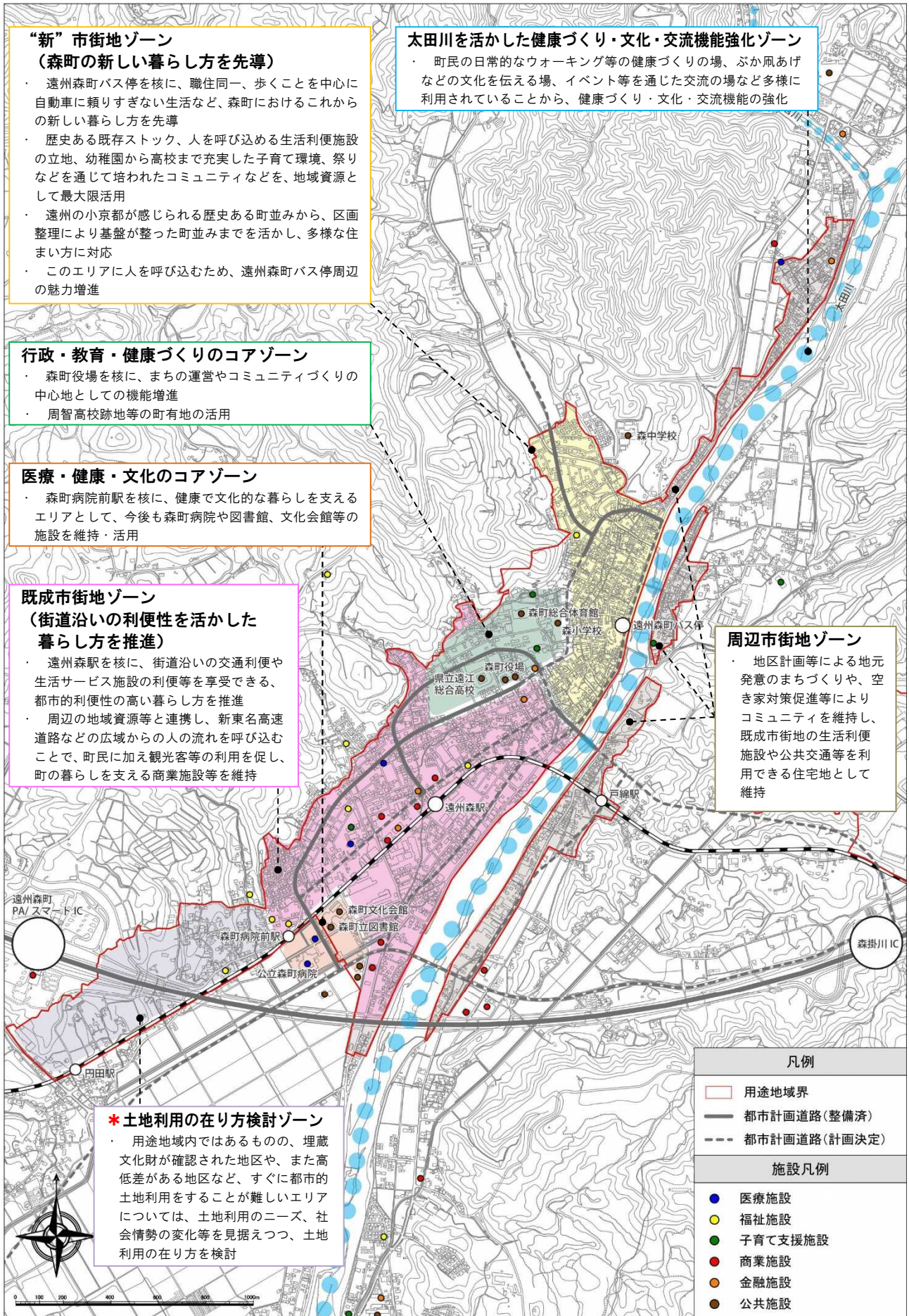
③ 機能の複合による交流機会の拡大

職住同一の推進、公共施設の多面的利用、鉄道駅やバス停等の交通結節点におけるイベント開催など、土地利用や施設を単一ではなく複合的に利用することで、利用者や関係者を増やし、交流の機会拡大を図る。

■ 都市計画区域内のまちづくりゾーニング図



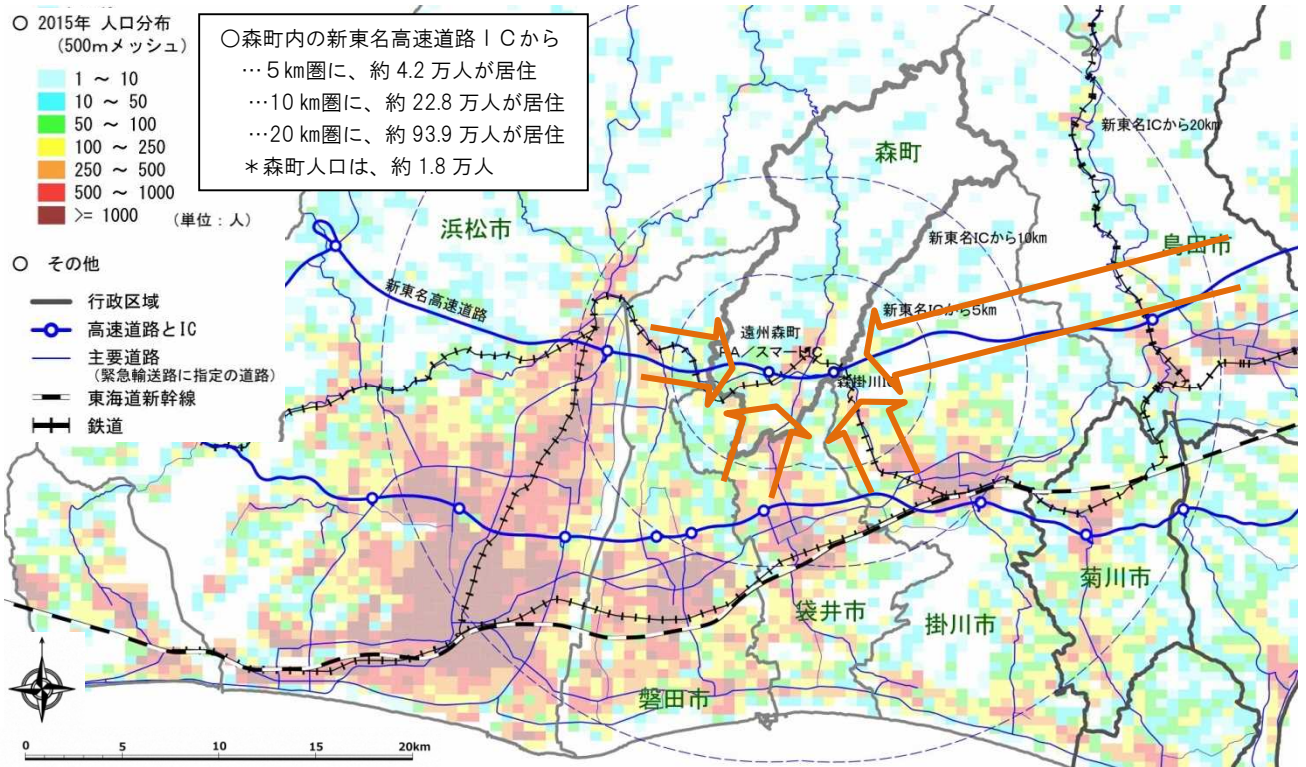
■ 都市計画区域内のまちづくりゾーニング図（森地区周辺拡大図）



視点③ 町に足りないものを補う、広域でのまちづくり

- ・ 昼間人口を呼び込み、生産性や賑わいを維持
- ・ 夜間人口（定住者、二地域居住者）を呼び込み、地域の活力を維持
- ・ 町に不足する都市機能は、町外のものを利用することも検討

■ 広域交通ネットワークを使った周辺からの人やモノの呼び込みのイメージ



■ 森町周辺の都市機能利用のイメージ

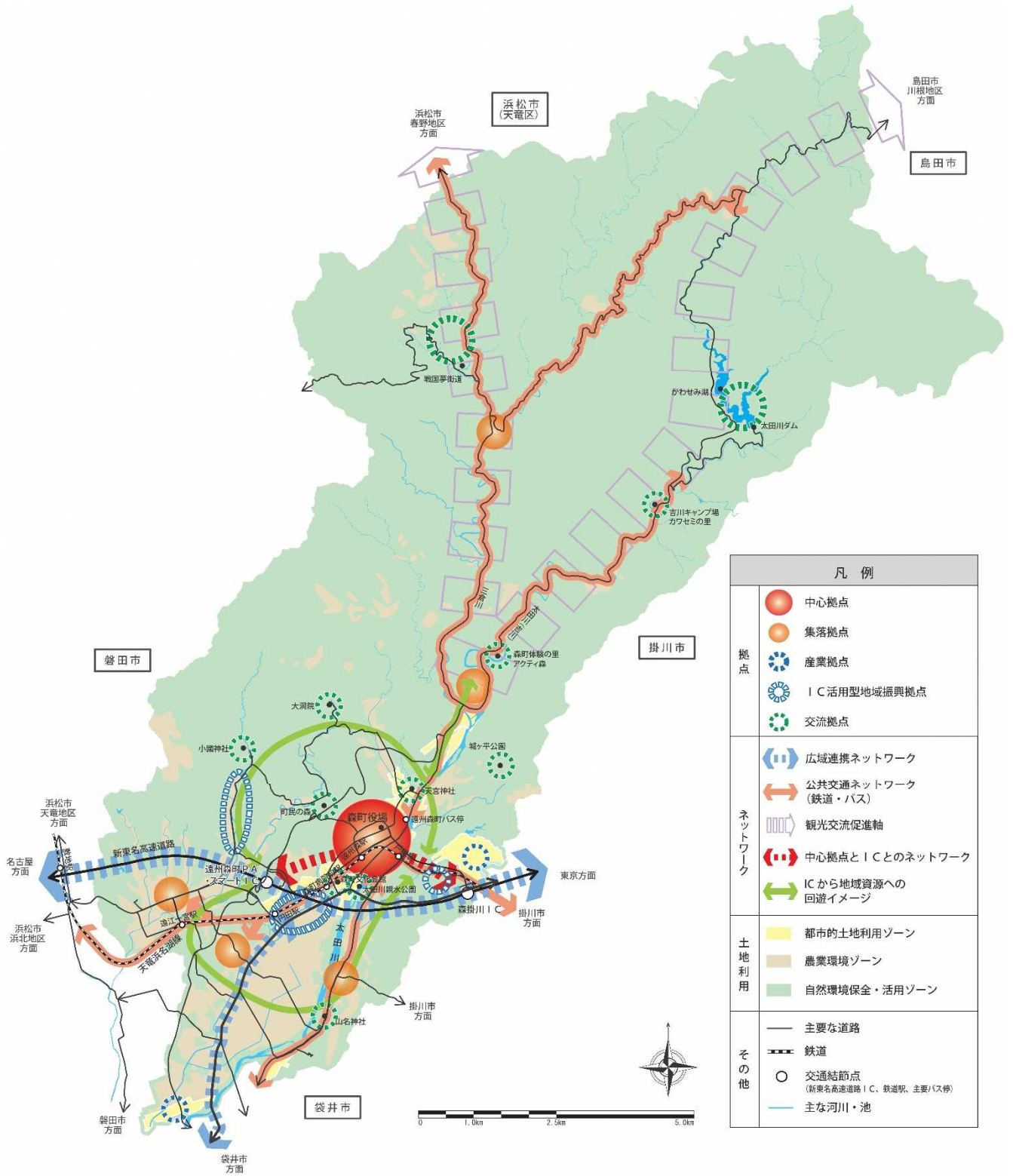


2) 将来都市構造

【 将来都市構造の構成要素 】

拠点	 中心拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天竜浜名湖線遠州森駅を中心に、周辺の森町役場をはじめとする公共施設が立地する市街地一帯の地区、及びまちの人口重心で古くからの町並みが残る地区を位置付けます。 ○ 商業・業務、文化、交流、居住、行政サービスなど、さまざまな都市機能の集積を図ります。 ○ 人口や都市機能の集積を活かし、「医・職・住」×「交流」のまちづくりの実践に取り組みます。
	 集落拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小学校や公民館などを中心に人口集積がみられる、地域コミュニティの中心地区を位置付けます。 ○ 中心拠点と公共交通でネットワークし、中心拠点の都市機能を利用できる環境を整えつつ、それぞれの立地特性や地域特性に応じ、都市機能の適切な配置や都市基盤の整備を図ります。 ○ なお、機能導入にあたっては、地域住民だけでなく、多様な関係人口の利用や交流を促すものを検討します。
	 産業拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 既に工業系土地利用が進められている北戸綿工業団地及び中川下工業団地を位置付けます。 ○ 周辺の自然環境との調和に配慮しながら、拠点として集積を図ります。 ○ なお、県の“ふじのくに”のフロンティアを拓く取組との連携や周辺地区の企業ニーズに応じ、工業団地の拡張も検討します。
	 IC活用型地域振興拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新東名高速道路森掛川IC及び遠州森町PA・スマートIC周辺を位置付けます。 ○ 豊かな観光資源や自然資源、交通の利便性を最大限にいかし、これからの森町の発展の原動力として、周辺の自然環境や農業との調整・調和や県の“ふじのくに”のフロンティアを拓く取組との連携を図りつつ、良好で個性的な環境の整備を図ります。
	 歴史・文化・観光の交流拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 小國神社、天宮神社、山名神社をはじめとする神社や大洞院などの寺院のほか、遠州の小京都を感じさせる、さまざまな歴史・文化的資源、観光資源などを位置付けます。 ○ 町民のみならず、観光客などの来訪者との交流を図る拠点としての活用を図ります。
	 水・みどりの交流拠点	<ul style="list-style-type: none"> ○ 森町体験の里アクティ森、太田川ダムとダム湖であるかわせみ湖や吉川キャンプ場、太田川親水公園、町民の森を位置付けます。 ○ 町民をはじめ、誰もが気軽に自然とふれあうことのできるうおいの場、憩いの場、体験の場としての活用を図ります。
ネットワーク	 広域連携ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新東名高速道路、(都) 森町袋井インター通り線を位置付けます。 ○ 人やモノの往来を通じ、これからのまちの活力を担うネットワークとして、機能の維持と活用を図ります。 * (都) 森町袋井インター通り線は整備促進
	 公共交通ネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ○ 天竜浜名湖線及びバス路線ネットワークを位置付けます。 ○ 町民の暮らしや交流、多様な産業を支えるとともに、町内外の連携を強化する公共交通ネットワークの充実を目指します。
	 観光交流促進軸	<ul style="list-style-type: none"> ○ 市街地から北部地域に延びる秋葉街道と「水・みどりの拠点」や「歴史・文化・観光拠点」といった点在する拠点を結ぶ軸として位置付けます。 ○ 地域の固有資源を有機的に連携し、町内のみならず、来訪者との交流を促進するための活用を図ります。
	 中心拠点とICとのネットワーク	<ul style="list-style-type: none"> ○ 新東名高速道路と町の中心部とのネットワークや地域資源の回遊を担う道路を位置付けます。
	 地域資源への回遊軸	<ul style="list-style-type: none"> ○ 沿道には、都市計画の位置付け、都市構造への影響、地域の景観との調和等を踏まえたうえで、ニーズに応じた適切な機能誘導を検討します。
ゾーン	 都市的土地利用ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ○ 住居、商業、工業など都市的土地利用を図る区域を位置付けます。 ○ 地域の特性に応じ、良好な住環境の形成、商業・業務施設の集積、工業施設の集積などを図りつつ、職住近接の暮らしやすい環境づくりを図ります。
	 農業環境ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ○ 都市的土地利用ゾーンの外側に広がる一団の水田や畑等の区域を位置付けます。 ○ 優良農地の保全による農業生産の向上を図ります。
	 自然環境保全・活用ゾーン	<ul style="list-style-type: none"> ○ 都市的土地利用ゾーンの外側に広がる山間地の森林などの自然資源や、自然景観、優良な農地と調和してコミュニティを形成している既存の集落地等を位置付けます。 ○ 豊かな自然資源の保全を図るとともに、観光レクリエーションなど町民の交流の場としての活用と、集落地等における生活環境の維持・向上を図ります。

■ 将来都市構造図



■ 将来都市構造図（都市計画区域内拡大図）

